

「市民の森づくり」－北海道のある町での活動－ 青柳 志郎

NPO 北広島森林ボランティア・メイプル

北海道道央地区の北広島市は、札幌市と新千歳空港の丁度中間辺りにある緑多い穏やかな地方都市である。市街地を離れると広葉樹の森があちこちにある。

市域の四割弱が森林で国有林、道有林、市有林、民有林が入り混じっている。

大半は林床がササに覆われて藪になっており、自由に歩き回ることにはできない。

そんな森の市有林の一つを 16 年前から市民による森づくりNPOの一員として手入れし、市民が森林浴を楽しめる場所に変えてきた。

そこは住宅団地に近い面積5ha程の所。半分は離農跡地でチシマザサ、ススキ、オオアワダチソウなどが生え繁っている荒地だった。

刈り払い機で草や笹を刈り整地して、何回かの市民植樹祭でミズナラ、ハルニレ、オニグルミ、エゾヤマザクラ、トチノキ、アオダモ、エゾエノキ、キハダ、ヤマモミジなど様々な広葉樹を植えた。今ではそれらが5~6mまで伸びて落葉広葉樹の森に育ちつつある。

もう半分は所謂雑木林である。ミズナラ、コナラ、ハルニレ、シナノキ、ホオノキ、ヤマモミジ、イタヤカエデ、キタコブシ、エゾヤマザクラ、ハリギリ、ミズキ、キハダ、ニセアカシア等の落葉広葉樹と所々にイチイが混じる自然林だ。

ここも林床が高さ2~3mにもなるチシマザサが密生する藪になっていた。このササは別名根曲り竹といい、笹というよりも殆ど竹のようで根元が太くて硬く、草刈り鎌では中々切れない。

7年前、ここに林内を巡る遊歩道を造った。



それは道東の阿寒一帯の自然環境保全活動をしている「前田一歩園財団」の援助を受けて、小型重機のカモ借り、会員有志の重労働によって三か月の短期間で成し遂げられた。

先ずはルート进行调查選定し、ルート上の樹木や枝をチェーンソーで伐木、枝払いし、チシマザサや雑草を刈り払い機でバリバリと刈る。この開削作業は素人集団としてはかなりの重労働だった。次に小型バックホーでの整地作業。幅1.5m、深さ15cmでルート上を掘り進む。これはプロへ委託し、五日間程で終了。これでルートは出来たが、そ

のままでは、路上に雑草やチシマザサが侵入し、元の木阿弥となってしまう。



そこで木材チップを厚く敷き詰めることになった。木材チップ工場で生産したトドマツなどの枝・根の粉碎バーク約 90 m³を森の入り口までトラックで運び、後はトンバックに詰め込んで一輪車に乗せ手押しで運んだ。路上の各所で下ろし、熊手で敷き均す。この作業は時期が夏だったこともあって、暑さと重さで会員はバテバテであった。

そのほか、林内の水流や涸れ沢に木橋を製作、設置。遊歩道の案内板作りや丸太のベンチなども製作。これらは会員に元大工の棟梁の人がいて、伐り出した木を利用して、自然に調和した見事なものが出来上がった。

こうして出来た遊歩道のおかげで、人は勿論、野鳥やエゾリスやキタキツネなどの小動物が動きやすくなり、また遊歩道沿いの植物も多様になってきた。チシマザサが無くなり陽光が地面まで届く所が出来、眠っていた種子が目覚め、芽を出し伸びてくる。

五月、この森の春は遊歩道沿いに咲く妖精の様な可憐な花々で始まる。

樹々の葉は出たばかりか、まだ冬芽のままのものもある。樹間から射し込む陽光が地面にまで届くこの時期を捉えて、大急ぎで花を咲かせ実をつける準備をするのだ。



ヒトリシズカ



ナニワズの花

ヒトリシズカ、ナニワズ、ユキザサ、エンレイソウ、マイツルソウなど、どれも小さな花だが、形がスッキリしていて、色がどぎつなく清楚でさわやかである。



エンレイソウ



サルメンエビネ

離農跡地の一面には水流があり、小さな水溜りにエゾサンショウウオの卵、湿地には 15 株程のミズバショウも咲く。

溜池ではエゾアカガエル達がキャラキャラと鳴き、恋の成就競争が始まっている。キタ

コブシの白い花、エゾヤマザクラの淡いピンクが咲き、森がどんどん明るく美しくなっていく。アカゲラやコゲラ、カラ類、ヒヨドリなどの野鳥達も活発に飛び交い、静寂だった森が次第に活気づいてくる。

初夏に向かって、木々の緑が次第に鮮やかになっていき、珍しいラン科の花なども咲き出す。腰に剪定バサミを携え、デジカメと双眼鏡をぶら下げて、所々、邪魔な笹を切ったり、落ちた枝をどけたりしながらゆっくり遊歩道を歩く。

野鳥やエゾリスの姿を双眼鏡で追ったり、道端の可憐な花々の写真を撮ったり、二、三時間を過ごす。丸太のベンチに座り目を閉じて、肺が洗われるような森の香気を深呼吸する。

私にとって至福の一刻である。



アカゲラ

六、七月、葉がすっかり繁って樹冠が上空を塞いでも、葉の隙間から、また葉を通して陽光が透き通って射し込んで来る。針葉樹林や葉の厚い常緑広葉樹林のような暗さはなく、林内はいつも明るい。

コクワの花が咲いている。小さな白い五弁の花だが、茎が鮮やかな紅色で、その対比が美しい。秋になればその実はミニキウイのようで甘く美味しい。



コクワの花

晩秋の森で、エゾリスが柳の枝から枝へ、幹から幹へと躍動する野生の姿は、見ていて嬉しく、こちらも元気を貰えるようだ。葉が落ちた森は見通しがいい。オオアカゲラやキバシリが高い枝上を伝い渡っている。



エゾリス

積雪の冬、真っ白な雪径をカンジキで歩く。

雪上にはエゾユキウサギ、キタキツネ、エゾシカなどの足跡が点々となっている。



森を歩いていると、時々散策している市民の人に会う。のんびりと一人で、或いは夫婦連れ、山菜採りの人、タケノコ目当ての人、キノコを探している人など様々だ。それぞれの季節の動物、植物、花、実を楽しむ。こんな森が身近にある環境は素晴らしい。

全国で放置されている山林は非常に多い。持ち主不明、手をかけたくともできない。そんな森が沢山ある筈だ。公有林も同じ事。山林の手入れなどには予算を付けてもらえない。国有林でも同様、昨年、国有林野管理経営法の改正によって、100ha規模の森を入札によって伐採権を与えるという事になった。植林の義務はなく、伐りっぱなしでもいいらしい。林野庁もお手上げなのだ。

市民の力によって、自分達の住む周りの森を手入れする時代になっている。高齢化社会に突入しているが、戦後生まれの人々は元気な人が多い。私達の団体は60～70代の会員が大半。しかも39名中女性が15名、38.5パーセント、会長も女性である。まさに北欧並みの女性活躍組織だ。政府組織や官庁組織よりもずっと先を行っている。

『若い力で云々・・・』というのがよく聞かれるが、老いた力もなかなかのものだ。こなしてきた経験から、特技を持つ人が多くいる。

私は人混みが嫌いなので、有名観光地、行楽地、繁華街などには滅多に行かないようにしている。春夏秋冬、人気は少なく鳥の声がし、小動物もちらほら見える静かな雑木林があれば十分だ。なので、昨今のコロナ禍による外出自粛なんぞは、ゼーンゼン響かない。

動物は植物と共に在る時に、一番安心感を得る。私にストレスは“無い”。(2020.12.9)